

2021年8月29日

ルカによる福音書#2

「神の憐れみの心による新しい出来事」

ルカによる福音書

1:5 ユダヤの王ヘロデの時代、アビヤ組の祭司にザカリアという人がいた。その妻はアロン家の娘の一人で、名をエリサベトといった。

1:6 二人とも神の前に正しい人で、主の掟と定めをすべて守り、非のうちどころがなかった。

1:7 しかし、エリサベトは不妊の女だったので、彼らには、子供がなく、二人とも既に年をとっていた。

1:8 さて、ザカリアは自分の組が当番で、神の御前で祭司の務めをしていたとき、

1:9 祭司職のしきたりによってくじを引いたところ、主の聖所に入って香をたくことになった。

1:10 香をたいている間、大勢の民衆が皆外で祈っていた。

1:11 すると、主の天使が現れ、香壇の右に立った。

1:12 ザカリアはそれを見て不安になり、恐怖の念に襲われた。

1:13 天使は言った。「恐れることはない。ザカリア、あなたの願いは聞き入れられた。あなたの妻エリサベトは男の子を産む。その子をヨハネと名付けなさい。

1:14 その子はあなたにとって喜びとなり、楽しみとなる。多くの人もその誕生を喜ぶ。

1:15 彼は主の御前に偉大な人になり、ぶどう酒や強い酒を飲まず、既に母の胎にいるときから聖霊に満たされていて、

1:16 イスラエルの多くの子らをその神である主のもとに立ち帰らせる。

1:17 彼はエリヤの霊と力で主に先立って行き、父の心を子に向けさせ、逆らう者に正しい人の分別を持たせて、準備のできた民を主のために用意する。」

1:18 そこで、ザカリアは天使に言った。「何によって、わたしはそれを知ることができるのでしょうか。わたしは老人ですし、妻も年をとっています。」

1:19 天使は答えた。「わたしはガブリエル、神の前に立つ者。あなたに話しかけて、この喜ばしい知らせを伝えるために遣わされたのである。

1:20 あなたは口が利けなくなり、この事の起こる日まで話すことができなくなる。時が来れば実

現するわたしの言葉を信じなかったからである。」

1:21 民衆はザカリアを待っていた。そして、彼が聖所で手間取るのを、不思議に思っていた。

1:22 ザカリアはやっと出て来たけれども、話すことができなかった。そこで、人々は彼が聖所で幻を見たのだと悟った。ザカリアは身振りで示すだけで、口が利けないままだった。

1:23 やがて、務めの期間が終わって自分の家に帰った。

いよいよルカによる福音書の本文が始まります。このザカリアとエリザベト、そしてヨハネの誕生が最初に書かれている理由はなぜなのでしょう。実は旧約聖書と新約聖書の間の期間は約400年。いわゆる中間時代と言われています。この400年の間に神殿が立て直され、社会が少し安定し、いわば都市的社會生活が可能になり、貨幣の使用による商売が安定してきたと同時に、宗教的には古いまとまりが壊れ、サドカイ派やファリサイ派というセクトが生まれ、宗教的な差別や区別が生まれ全体としては「まとまりのない」個人的な生き方が可能になってきました。

ですから、ある意味で旧約聖書的な土台の終わりと新しい方向性を指している時代と考えることができます。

1) 神の祝福は「祭司を中心、神殿を中心に」という発想

旧約聖書の世界ではその祝福は神殿中心、祭司中心と考えて良いかもしれません。神様の祝福はそれらの「組織」「人物」を通してもたらされると考えられていたと思います。そして、いろいろな変化があったにせよ、ルカもまず神の奇跡がこの老人祭司ザカリアとその妻エリザベトの間にもたらされたことを書き、確かに神は神殿を通し祭司たちを通して祝福を届けてきたことを語っています。

ザカリアとエリザベトの間には子供がいませんでした。旧約の世界においては子供がいなかったというはある意味神の祝福を完全に味わっていないと理解されていました。それは恥ずべきことのように理解されてきました。

そして旧約聖書の中には神様がそういう環境にいる夫婦に子供を与える大事な記事が出てきます。アブラハムとサラに与えられたイサクはその典型でしょう。預言者サムエルも同様です。

そしてここで神様は同じようなことを祭司ザカリアと妻エリザベトの間に起こそうとしています。

2) ザカリアとエリザベトを通して起こされる子供について

香を焚く役割を果たすためにザカリアが神殿に行き、その役目を果たそうとしていると主の天使が現れ、彼に語ります。

1:13 天使は言った。「恐れることはない。ザカリア、あなたの願いは聞き入れられた。あなたの妻エリザベトは男の子を産む。その子をヨハネと名付けなさい。

1:14 その子はあなたにとって喜びとなり、楽しみとなる。多くの人もその誕生を喜ぶ。

1:15 彼は主の御前に偉大な人になり、ぶどう酒や強い酒を飲まず、既に母の胎にいるときから聖霊に満たされていて、

1:16 イスラエルの多くの子らをその神である主のもとに立ち帰らせる。

1:17 彼はエリヤの霊と力で主に先立って行き、父の心を子に向けさせ、逆らう者に正しい人の分別を持たせて、準備のできた民を主のために用意する。」

この子はこれからやってくるはずの救い主のために道を整えるための子供であること。

偉大な人物となり、聖霊に満たされ、人々を神のもとに立ち返らせる役割を果たす人になる。

ということが語られます。

名前も神様から指定されていて「ヨハネ」と名付けられるべきことが教えられています。

これは本当に「主によって、主のために」必要な人材がこの老祭司夫妻から生まれるという奇跡の物語であり、人知を超えた出来事として記録されるべき内容なのです。

3) ザカリアの応答

ザカリアはきわめて人間的な応答をします。要するに信じられないのです。

1:18 そこで、ザカリアは天使に言った。「何によって、わたしはそれを知ることができるのでしょうか。

わたしは老人ですし、妻も年をとっています。」

1:19 天使は答えた。「わたしはガブリエル、神の前に立つ者。あなたに話しかけて、この喜ばしい知らせを伝えるために遣わされたのである。

1:20 あなたは口が利けなくなり、この事の起こ

る日まで話すことができなくなる。時が来れば実現するわたしの言葉を信じなかったからである。」

ザカリアの中には「自らの功德・功績」「自らの体力」「自らの信仰心」があれば神は何かしら祝福をもたらしてくださるという考えがあったようです。

それはある意味、旧約的な発想であり、当時の宗教事情の中で一般的な発想とも言えるものです。

4) 神の憐れみの心による新しい出来事

後半の部分を読んでいくとヨハネの誕生が描かれており口がきけるようになったザカリアの讃歌が書かれています。その中にある聖句

1:78 これは我らの神の憐れみの心によるこれは重大なことばです。

この発見、この気づきはザカリアにとって重要、重大なものです。そして、この福音書全体を通して伝えられる

福音の本質がこの言葉の中にあるように思います。

祭司ザカリアでさえ信じられないような新しいこと、ヨハネという名前もザカリアの家系には関係ない名前でしたから、それは親戚もびっくりすることになるのですが、神は、希望がなさそうな老夫婦から「主の道を備えるべき人」を起こし、やがて、このヨハネは荒野で生活しそこでバプテスマを施し、イエス様も彼から洗礼を受けることになるのですが、それらはすべて今までの時代の中では想像できないような新しい出来事でした。新しい出来事の幕開けとして祭司ザカリアとエリザベトの間に子供を与え

誰も考えることができなかったような救いの道を神は整えようとしておられます。

そして、それはまさに、人間の努力やがんばりの報いとしてではなく「神の憐れみの心」の現れとして

それがもたらされるというのです。

そして、神はその「憐れみの心」に満ちたお方です。「神は愛です」といわれているとおり、憐れみ深い意識で

わたしたちひとりひとりを守り、支え、救い出そうとしておられます。

私たちは、それを喜び、憐れみ深い神を信頼して受け取るだけしかできないのです。

神の心を教えられ、その憐れみの心とそこから始められた出来事、祝福を丁寧に受け取ること、それが最も大事なことです。「なぜ」「どうして」という質問は後回しにして、まずは、「感謝します」とうなづいて受け取ることが大事です。神の救いの方法、神の憐れみの範囲を私たちは簡単に断定してしまってはなりません。ルカは福音書の中に社会的に軽蔑されていた罪人と呼ばれる人たちへのイエス様の近づきを書き、また女性や病人に対する愛や憐れみを描いています。これらは、古いユダヤ教的枠組みの中で

は考えにくいことだったと思います。しかし、憐れみ深い神は、まさに、それらの人々に近づき、祝福をもたらそうとしておられます。いよいよ、新しいことが描かれようとしています。

神は新しいこと、神の憐れみのみわざを実現しようとしています、あなたの生活の中にも。

MACF 礼拝映像はこちらです。

<https://youtu.be/Nr8wc1r7Gjl>